

お金に対する態度と価値志向 I

—態度の構造と態度尺度の構成—

原 岡 一 馬

問 題

現代社会の中で、人間行動に大きな影響をもつものにお金がある。何をするにもお金に関連ないものはないと言つてよい。お金は社会的地位や勢力と関わりをもち、人の価値と結びつき、いろいろな欲求と関連し、仕事や業績の評価とも関連する。したがって、自己評価にもつながり、人を動かす手段としての働きもあり、動機づけの原因にもなる。また、現代社会において生活するための手段であり、不安や安心感など人間の精神衛生にも結びつくものである。

このように、お金は人間行動を引き起こす源泉となるので、社会的人間行動を理解するには、人が、お金に対しどのような態度をもち、どのように動機づけられ、どのように行動するかを科学的に研究することが必要であろう。

そこで先ず、お金に対する態度尺度を構成し、態度構造を明らかにすることと、それらの構造と価値志向や行動様式との関連を明らかにすることを目的とするものである。

本研究では、お金に対する態度の構造がどうなっているかを2つの研究によって明らかにしようとするものである。第1研究では、お金に対する態度を表す内容を幅広く集め、それを構造化することを目的とし、第2研究では、第1研究の結果を基に質問項目を作成し、調査を行い、その結果を因子分析してその構造を明らかにし、主要な次元を抽出してお金に対する態度測定の尺度を構成し、その結果と行動との関係を吟味しようとするものである。

第1研究 方 法

お金に対する態度を測定するための意見を幅広く収集するために、「お金と人間の関係」について思いつくことをできるだけ多く自由記述させた。この場合、行為、感情、評価などを想起しやすいように7つの具体的な状況

を提示した。すなわち、①お金を儲けることについて、②お金を貸すことや借りることについて、③お金を与えることや貰うことについて、④お金を使うことや貯めることについて、⑤お金の遣い道や予算をたてるについて、⑥財テク、投機、マネーゲームについて、⑦税金について、である。なお、この他に自由記述の欄を設けた。

被調査者：できるだけ多様な意見を集めるため、年齢、性別、職業などを考慮して選択し、郵送調査を行った。回答を送り返した人は40名であり、年齢は23歳から60歳にわたり、男性18名、女性22名であった。職業は、公務員、雑誌編集者、ソーシャルワーカー、小学、中学、高校教師、会社員、証券マン、大学院生、自営業、主婦、無職、などにわたっていた。

得られた意見内容を検討し、その意味内容をもとに単位に区切り、それぞれが何を意味するかを簡潔に表現したステートメントに変換し、カードに記録した。その数は617個に達した。これらをKJ法を用いて構造化した。

結 果

得られた結果は、(1)お金は人々や社会を豊かにし幸せにするものであり、お金を得たり、使ったりすることは楽しいことである。(2)お金で人を評価することはできないが、その使い方によって、その人の生き方がわかるものである。(3)お金のやりとりやお金儲けなどが、人々を狂わせ、人間関係を悪くし、ついには社会や国家を崩壊させることになる、の3つの領域に分けられた。その内容と構成は次のとおりである。

お金に対する態度の構造と内容

【I】 お金は人々や社会を豊かにし、幸せにするものであり、お金を得たり、使ったりすることは楽しいことである。

- A. お金があれば地位や権力がもて、社会的に有利な立場に立て、幸せになる可能性が高く、社会を豊かにことができる。
- A-1. お金があれば地位や権力がもて、大抵のこと

お金に対する態度と価値志向

- はできる。したがって人はお金を増やそうとする。
- A-1-a 人はお金を増やそうとするものである。
お金のためなら大抵のことはする。
- A-1-a-① お金がたくさんあるにこしたことはなく、人はどうして増やそうかと考えるものである。
- A-1-a-①-1 人は誰れしも限られた財産をどうしたら増やせるか考えている。
- A-1-a-①-2 お金はたくさんあるにこしたことはない。
- A-1-a-② 人は結局、お金を得ることが目的であり、お金のためならどんなことでもする。
- A-1-a-②-1 人生の最終目的はお金儲けである。
- A-1-a-②-2 お金のためなら何でもするという人間が多い
- A-1-a-②-3 人間はお金を得ることが目的で働いている。
- A-1-b お金さえあれば地位や権力がもて、たいていのことはできる。
- A-1-b-① お金をもてばもつほど、地位や権力がもて、社会を思うように動かせる。
- A-1-b-①-1 他人に何かおごってやると心理的に優位な立場に立つことができる。
- A-1-b-①-2 金さえあれば社会を思うように動かせる。
- A-1-b-①-3 お金をもてばもつほど権力が増す。
- A-1-b-② お金さえあればたいていのことはできる。
- A-1-b-②-1 たいていのことはお金で解決できる。
- A-1-b-②-2 人間何をするにも先立つものはお金である。
- A-2. 社会生活を行うには、お金がなければならず、お金があれば幸せになる可能性が高い。
- A-2-a 現代社会で一人前の文化生活を送るためににはお金がなければならない。
- A-2-a-① 安定した文化生活を送るためににはお金がなければならない。
- A-2-a-①-1 安定した生活を送るにはお金の蓄えが必要である。
- A-2-a-①-2 お金がなければ文化生活は営めない。
- A-2-a-② 現代社会で一人前に生きていくには、お金がなければできない。
- A-2-a-②-1 お金がなければ一人前になれない。
- A-2-a-②-2 社会的な付き合いにはお金が必要である。
- A-2-a-②-3 現代社会では、お金の切れ目が縁の切れ目である。
- A-2-b 社会生活をスムーズにやっていくのにお金の果たす役割は大きい。
- A-2-b-① 社会慣行にしたがってお金を出すことは、社会生活をスムーズにし、慈善行為につながる。
- A-2-b-①-1 お祝い金やお見舞い金は、社会生活上潤滑油的働きをする。
- A-2-b-①-2 お金を与えることは慈善行為として美德である。
- A-2-b-② 現代社会の仕組みの中で生きていくには、お金の機能や価値を考える必要がある。
- A-2-b-②-1 商売や事業をするには借金は必要な行為である。
- A-2-b-②-2 お金が現代社会の仕組みを支えている。
- A-2-b-②-3 雇われている人が雇用者に対して負っている責務は、金銭的価値にあると考えるのが妥当である。
- A-2-c お金があれば心にゆとりができる、幸せになる可能性が高くなる。
- A-2-c-① お金をもっていればいるほど幸せである。
- A-2-c-② お金があれば心にゆとりができる。
- A-2-c-③ お金のある人はお金のない人より幸福になる可能性が高い。
- A-3. お金によって人々の能力や価値が評価でき、社会を豊かにすることができる。
- A-3-a 人間の能力や信用や価値などはお金によって評価できる。
- A-3-a-① 人間の価値や地位を評価するのに、お金は適切な基準である。
- A-3-a-①-1 地位体系が必要な場合、お金はその適切な基礎となる。
- A-3-a-①-2 現代社会ではお金が価値基準となっている。
- A-3-a-①-3 どれくらい財産をもっているかで社会的地位が決まる。

原 著

- A-3-a-①-4 お金は人間を評価するものさしである。
- A-3-a-①-5 どれくらい収入があるかによって能力が評価される。
- A-3-a-①-6 労働がお金で評価されるのは当然である。
- A-3-a-② お金が借りられるのは、その人に信用があり、能力があるからである。
- A-3-a-②-1 借金ができるのはその人に信用があるからである。
- A-3-a-②-2 上手な借金は処世術のひとつである。
- A-3-b 世の中が豊かになり活性化するのはお金のお陰である。
- A-3-b-① 世の中が活性化しよりよくなるのはお金のお陰である。
- A-3-b-①-1 現代社会が何事についてもうまく機能するためには、絶対にお金が必要である。
- A-3-b-①-2 お金のお陰で世の中はよりよくなる。
- A-3-b-①-3 お金が使われれば使われるほど、社会は活性化する。
- A-3-b-①-4 西欧社会の経済民主制は、すべてお金によって可能となっている。
- A-3-b-①-5 みんながお金を貯めれば社会は豊かになる。
- A-3-b-② 財テクやマネーゲームは、社会が豊かで活性化するために必要なことである。
- A-3-b-②-1 財テクやマネーゲームは、経済の活性化に必要なことである。
- A-3-b-②-2 財テクやマネーゲームが流行っているのは、社会が豊かな証拠である。
- B. お金儲けをしたり、お金を思い切り使うことは、楽しいことである。
- B-1 お金は使いたいとき、何にもしばられずに思い切り使うことが楽しい、そうでなければ、お金を貯めて意味がない。
- B-1-a 予算など考えず、使いたいとき思い切りお金を使うことは楽しいし、気持ちがよい。
- B-1-a-① 予算をたてたりお金の使い道を考えるのは、自分を縛るような気がして窮屈でストレスがたまる。
- B-1-a-② お金の使い道や予算を考えずに思い切り使うのは楽しいことである。
- B-1-b こつこつ働いたからといってお金はたまるものではない。また、使わなければ貯めるだけでは意味がない。
- B-1-b-① お金を貯めるのは使うためであり、貯めるだけでは意味がない。
- B-1-b-② 真面目にこつこつ働いたからといって、必ず儲かるとは限らない。
- B-2 お金儲けをやるのは当然であり、楽しいことである。
- B-2-a お金儲けは生きていく上で当然のことであって、やっていけないというのはできない人の負け惜しみである。
- B-2-a-① お金は汗水たらして得るものというの、財テクができない人の負け惜しみである。
- B-2-a-② お金儲けは生きていく上で当たり前の活動である。
- B-2-b お金をもらったり、儲けたり、貯めたりすることはそれだけで楽しいことである。
- B-2-b-① 贈り物は品物よりお金でもらう方がうれしい。
- B-2-b-② お金をもらうのは、どんな場合でもうれしいことである。
- B-2-b-③ お金儲けはそれだけで楽しみである。
- B-2-b-④ お金を貯めることそのものが楽しみである。
- 【II】 お金で人を評価することはできないが、その使い方によって、その人の生き方がわかるものである。
- A. お金の使い道を考え、有意義に使うのは楽しいことであり、その使い方からその人の生き方がわかる。
- A-1 お金を有意義に使うかどうかでその人の生き方や人生観がわかる。
- A-1-a 目先の楽しみや感情だけによってお金を使うのではなく、有意義な使い方をすべきである。
- A-1-a-① 目先の楽しみだけにお金を使うのはよくない。
- A-1-a-② 無駄金はなるべく使わず、意義有る使い方をすべきである。
- A-1-b お金に対する態度や使い方で、その人の生き方や価値観がわかる。
- A-1-b-① お金の使い方でその人の価値観がわかる。

お金に対する態度と価値志向

- A-1-b-② お金に対する態度は、その人の人間性を反映するものである。
- A-1-c 予算を立てお金の使い道を考えることは、自分の生き方を決め、自己管理をすることにつながる。
- A-1-c-① お金の使い道や予算を考えることは、自分の人生設計を考えることにつながる。
- A-1-c-② お金の使い道を考え予算を立てることは、自己管理の意味で必要なことである。
- A-2 お金の使い道を考え、お金を使うことは夢がふくらみ楽しいことである。
- A-2-a お金の使い道や予算を考えることは、夢がふくらみ楽しいことである。
- A-2-b どんな場合でもお金を使うことは楽しいことである。
- B. お金は生きていくための手段であって、お金でもって人間を評価することはできない。
- B-1 普通の生活ができるお金があれば十分で、お金のためだけに働くのは空しいことである。
- B-1-a お金のためだけに働いたり動いたりするのは空しく、良くないことである。
- B-1-a-① お金のためだけに働くのは空しい。
- B-1-a-② お金儲け第一主義は良くないことである。
- B-1-b 普通の生活をしていくだけのお金があれば十分である。
- B-2 人間の価値はお金では評価できない。
- B-2-a お金で人間は評価できない。
- B-2-b 人間にとて大切なものはお金では買えない。
- 【III】 お金のやりとりやお金儲けなどが、人々を狂わせ、人間関係を悪くし、ついには社会や国家を崩壊させることになる。
- A. お金がもとで、人間がみにくくなり、人間関係を悪くし、社会的には非行や犯罪が起こってくる。
- A-1 お金をあげたり貰ったり、貸したり借りたりすることは、人間関係を悪くし、人間を駄目にすることになる。
- A-1-a できればお金の貸し借りはしない方がよい。
- A-1-b 人間関係にお金を持ち込むのは、必然的にその関係を悪化させることになる。
- A-1-c いわれのないお金をもらうことは、人間を腐敗させるものである。
- A-1-d 他人から何かおごってもらうと負い目を感じることになる。
- A-1-e お金の貸し借りは人間関係を損なうことになる。
- A-2 人間関係の歪みも、社会的非行や犯罪も、究極的にはお金がもとで起こるものである。
- A-2-a お金は諸悪の根源である。
- A-2-b 社会病理的問題は、大部分、お金がもとで引き起こされたり悪化したりするものである。
- A-2-c お金は犯罪のもとになる。
- A-2-d お金が関係してくると何事も汚れたものになる。
- A-3 お金があるため社会に不公平をもたらし、理想社会が遠のいていく。
- A-3-a 世の中に不公平があるのはお金があるためである。
- A-3-b 理想社会を確立するには、貨幣制度の廃止が前提条件である。
- A-4 お金は人間をまどわし、みにくくし、犯罪に引き込む原因をつくるものである。
- A-4-a 必要以上にお金をもつと人の心は醜くなる。
- A-4-b 社会で頻繁に起きている犯罪には巨額のお金が絡んでいる。
- A-4-c お金は人間をまどわす根源である。
- A-4-d 究極的には、お金は不潔なものか不潔さを象徴したものである。
- B. 財テク・マネーゲームは国や社会を崩壊させ、人々を狂わせるものである。
- B-1 財テク・マネーゲームをやるのは、経済感覚を狂わせ、勤労意欲を喪失させるものである。
- B-1-a 財テク・マネーゲームは、人々の勤労意欲を減退させるものである。
- B-1-b 財テク・マネーゲームをやってるとお金のありがたさがわからなくなる。
- B-1-c マネーゲームは、人生の意義と経済感覚を狂わせる根源である。
- B-1-d 財テク・マネーゲームなどをやるのは賭け事をやるのと同じである。
- B-2 マネーゲームの機構は、人間社会をあやめるものであり、国や社会を崩壊させるものである。
- B-2-a マネーゲームのように、お金がお金を産むという機構は本来間違っている。
- B-2-b マネーゲームは国や社会を崩壊させてし

まうものである。

第2研究 お金に対する構造と実態

第1研究において得られた結果を参考に、内容が重なり合いのないように配慮して、お金に対する態度測定のための質問項目を作り変え、これに原岡（1988）の中のお金に対する態度質問の12項目を加えて計82の質問項目を作成し、これをランダムな順序に並べて回答を求めた。回答の方法は、①そう思う、②やや思う、③どちらともいえない、④あまり思わない、⑤思わない、の5段階による選択法であった。

被験者は、大学生525名で、男性374名、女性151名であった。

結果と考察

(1) お金に対する態度項目に対する反応平均と標準偏差

個々の項目に対する反応を「そう思う」5点、「やや思う」4点、「どちらともいえない」3点、「あまり思わない」2点、「思わない」1点として平均とSDを算出した。結果はTable 1に示す通りである。

Table 1 お金に対する態度についての質問項目への反応

項目	Mean	SD
1. 皆がお金を貯めれば社会は豊かになる。	2.47	0.99
2. お金が使われれば使われるほど社会は活性化する。	3.37	1.00
3. お金がなければ文化生活は営めない。	3.71	1.10
4. お金の貸し借りはできればしない方がよい。	3.91	1.15
5. 人間はお金を得るのが目的で働いている。	2.99	1.34
6. お金のためだけに働くのは空しい。	4.39	0.95
7. 普通の生活をしていくだけのお金があれば十分である。	2.94	1.36
8. 人間なにをするにも先立つものはお金である。	3.27	1.24
9. たいていのことはお金で解決できる。	2.60	1.25
10. お金のためなら何でもするという人が多い。	3.39	1.04
11. 労働がお金で評価されるのは当然である。	3.21	1.08
12. 人間にとて大切なものはお金では買えない。	4.48	0.85
13. お金は人間を評価するものさしである。	1.68	0.91
14. 現代社会では「金の切れ目が縁の切れ目」である。	2.60	1.18
15. お金の貸し借りは人間関係を損なうことになる。	3.66	1.02
16. お金があれば心にゆとりがもてる。	3.81	1.00
17. 現代社会ではお金が価値基準となっている。	3.84	0.99
18. お金は持っていればいるほど幸せである。	3.10	1.18
19. 社会的付き合いにはお金が必要である。	4.16	0.73
20. お金がなければ、人は一人前になれない。	2.98	1.18
21. 世の中に不公平があるのはお金があるためである。	3.64	1.08
22. お金が現代社会の仕組みを支えている。	3.93	0.86
23. 必要以上にお金を持つと人の心は醜くなる。	3.84	1.08
24. 商売や事業をするには、借金は必要な行為である。	3.79	0.96
25. 社会で頻繁に起きている犯罪には巨額のお金が絡んでいる。	4.17	0.85
26. お金を与えることは慈善行為として美德である。	2.66	0.19
27. 財テク・マネーゲームは経済の活性化に必要なことである。	2.85	1.02
28. お金は犯罪のもとになる。	3.67	1.01
29. お金を持てば持つほど権力が増す。	3.64	1.22
30. 目先のためだけにお金を使うのはよくない。	3.40	1.17
31. お金さえあれば社会を思うように動かせる。	2.42	1.24
32. マネーゲームは国や社会を崩壊させてしまうものである。	3.29	0.96
33. お金は人間を惑わす根源である。	3.91	0.93
34. お金はたくさんあるにこしたことはない。	4.04	1.02

お金に対する態度と価値志向

35. お金儲けは生きていく上で当たり前の活動である。.....	3.65	1.10
36. お金儲け第一主義は良くないことである。.....	3.92	1.09
37. 財テク・マネーゲームは人々の勤労意欲を減退させるものである。.....	3.37	0.95
38. 真面目にコツコツ働いたからといって、必ず儲かるとは限らない。.....	4.06	1.08
39. 財テク・マネーゲームをやっているとお金のありがたみがわからなくなる。.....	3.70	0.95
40. 上手な借金は処世術のひとつである。.....	3.56	1.02
41. 人生の最終目的はお金儲けである。.....	1.93	1.11
42. いわれのないお金を貰うことは人間を腐敗させるものである。.....	3.87	0.93
43. 無駄金はなるべく使わず、意義のある使い方をすべきである。.....	4.19	1.01
44. マネーゲームは人生の意義と経済感覚を狂わせる根源である。.....	3.53	0.91
45. お金を貯めるのは使うためであり、貯めるだけでは意味がない。.....	4.22	0.95
46. お金で人間は評価できない。.....	4.60	0.85
47. お金の使い道を考え予算をたてることは、自己管理の意味で必要なことである。.....	4.56	0.62
48. マネーゲームのようにお金がお金を産むという機構は本来間違っている。.....	3.36	1.03
49. お金の使い道や予算を考えることは、自分の人生設計を考えることにつながる。.....	4.07	0.89
50. お金の使い方でその人の価値観がわかる。.....	3.71	1.08
51. どれくらい財産をもっているかで社会的地位が決まる。.....	3.05	1.23
52. 財テク・マネーゲームが流行っているのは社会が豊かな証拠である。.....	3.50	1.13
53. 安定した生活を送るにはお金の蓄えが必要である。.....	4.44	0.68
54. 財テク・マネーゲームなどをやるのは賭け事をやるのと同じである。.....	3.78	1.03
55. お金の使い道や予算を考えずに思い切り使うのは楽しいことである。.....	3.40	1.24
56. 人は誰しも限られた財産をどうしたら増やせるか考えている。.....	3.81	1.04
57. 予算をたてたりお金の使い道を考えるのは、自分を縛るような気がして窮屈でストレスがたまる。.....	2.77	1.09
58. 「お金は汗水たらして得るもの」というのは、財テクができない人の負け惜しみである。.....	2.13	1.08
59. どれくらいの収入があるかによって能力が評価される。.....	2.71	1.22
60. 借金ができるのは、その人に信用があるからである。.....	3.53	1.17
61. お金に対する態度はその人の人間性を反映するものである。.....	3.90	0.94
62. お祝い金やお見舞い金は、社会生活上潤滑油的働きをする。.....	3.20	1.12
63. 他人から何かおごってもらうと負い目を感じることになる。.....	3.08	1.10
64. 他人に何かおごってやると、心理的に有意な立場に立つことができる。.....	2.99	1.11
65. お金儲けはそれだけで楽しみである。.....	3.09	1.19
66. お金をもらうのはどんな場合でもうれしいことである。.....	3.49	1.22
67. どんな場合でも、お金を使うのは楽しいことである。.....	3.10	1.13
68. 贈り物は品物よりお金でもらう方がうれしい。.....	3.10	1.30
69. お金を貯めることそのものが楽しみである。.....	2.72	1.14
70. お金の使い道や予算を考えることは夢がふくらみ楽しいことである。.....	3.77	0.99
71. お金は諸悪の根源である。.....	3.01	1.09
72. 現代社会が何事についてもうまく機能するには、絶対にお金が必要である。.....	3.66	1.01
73. 社会病理的問題は、大部分、お金がもとで引き起こされたり悪化したりするものである。.....	3.64	0.89
74. 雇われている人が雇用者に対して負っている責務は、金銭的価値にあると考えるのが妥当である。.....	3.14	0.88
75. 人間関係にお金を持ち込むのは、必然的にその関係を悪化させることになる。.....	3.71	0.92
76. お金のある人は、お金のない人より幸福になる可能性が高い。.....	3.36	1.19
77. 究極的には、お金は不潔なものか、不潔さを象徴化したものである。.....	2.77	0.90
78. 西欧社会の経済民主制は、すべてお金によって可能となっている。.....	3.18	0.79
79. 理想社会を確立するには、貨幣制度の廃止が前提条件である。.....	2.44	1.04
80. 地位体系が必要な場合、お金はその適切な基礎となる。.....	3.18	1.01
81. お金が関係してくると、何事も汚れたものになる。.....	2.87	0.95
82. お金のおかげで、世の中はより良くなる。.....	2.74	0.88

(2) お金への態度の実態

上記82項目のお金への態度に対する回答のうち、特に目立って高い反応を示した項目、つまり、高い賛成を示した平均4.1以上の高得点項目と、低い反応を示した項目、つまり、高い反対を示した平均2.5以下の低得点項目を上げてみると、現実のお金への全体像がわかる。それは、次のとおりである。

a) 高得点項目（肯定的反応項目、平均4.1以上）

- 6) お金のためだけに働くのは空しい。12)人間にとつて大切なものはお金では買えない。19) 社会的付き合いにはお金が必要である。25) 社会で頻繁に起きている犯罪には巨額のお金が絡んでいる。43) 無駄金はなるべく使わず、意義のある使い方をすべきである。
- 45) お金を貯めるのは使うためであり、貯めるだけでは意味がない。46) お金で人間は評価できない。
- 47) お金の使い道を考え予算をたてることは、自己管理の意味で必要なことである。53) 安定した生活を送るにはお金の蓄えが必要である。

b) 低得点項目（否定的反応項目、平均2.5以下）

- 1) 皆がお金を貯めれば社会は豊かになる。13) お金は人間を評価するものさしである。31) お金さえあれば社会を思うように動かせる。41) 人生の最終目的はお金儲けである。58) 「お金は汗水たらして得るもの」

というのは、財テクができない人の負け惜しみである。

79) 理想社会を確立するには、貨幣制度の廃止が前提条件である。

以上のことから、現在の大学生たちは、社会におけるお金の必要性を認めながら、お金万能ではなく、人間の価値をお金で評価するのではなく、お金を十分に管理し統制することが大切であると考えているものと解釈される。このことは、原岡（1989, 1990）の研究結果の傾向と一致するものであった。

(3) お金に対する態度項目に対する反応についての因子分析と次元

第1研究で得られた多様な意見から、82項目の質問項目を作成し、これに対する反応を求めたが、それらがどのような内容と構造をもっているかを確かめるため、因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を用いて因子を抽出し、各項目の中から各因子に対する負荷量の高い項目を選んで尺度を構成し、それらの信頼性と意味づけを検討することにする。なお、各因子尺度項目として選ばれたものの因子負荷量についてはTable 2に太字で示されている。

因子分析の結果、6つの因子が抽出された。それをTable 2に示すこととする。

Table 2 お金に対する態度の因子負荷行列

項目番号	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V	因子 VI	共通性
1	0.05047	0.01361	-0.02503	0.09685	0.27789	-0.31880	0.19159
2	0.10874	0.06793	-0.03570	0.06042	0.18396	0.12473	0.07076
3	0.34767	-0.01967	0.01497	0.06447	0.31896	0.05794	0.23074
4	-0.08742	0.13568	0.13942	0.32138	-0.13898	-0.26556	0.23861
5	0.32366	0.00777	-0.06810	-0.01167	0.26679	-0.06867	0.18549
6	-0.25612	-0.00237	0.16530	0.23847	-0.14375	0.10671	0.18185
7	-0.21540	0.07590	0.09873	0.14816	-0.20220	-0.04387	0.12667
8	0.54258	0.12566	0.01891	0.00704	0.17719	-0.02441	0.34258
9	0.57514	0.15189	-0.06549	-0.13852	0.04747	-0.02360	0.38015
10	0.34590	0.30770	0.05831	0.00849	0.06038	0.06463	0.22563
11	0.38576	-0.05372	-0.01860	-0.02242	0.05111	0.06917	0.15994
12	-0.30065	0.12207	0.16756	0.31732	-0.01534	-0.05844	0.23771
13	0.40931	0.00469	-0.18163	-0.09260	0.13865	-0.12559	0.24412
14	0.42794	0.13967	0.06827	-0.01708	-0.09191	0.01053	0.21615
15	0.05889	0.19876	0.21004	0.25538	-0.03408	-0.15547	0.17764
16	0.42432	-0.03175	0.01416	0.11239	0.11010	0.05036	0.20855
17	0.43887	0.07840	0.05152	0.06414	-0.03192	0.06123	0.21029
18	0.49220	-0.04896	-0.12221	-0.03343	0.28809	-0.11086	0.35600
19	0.43029	-0.05016	0.00559	0.03805	-0.05170	0.20662	0.26123

お金に対する態度と価値志向

20	0.51537	-0.03952	0.10082	0.01711	0.07249	0.04991	0.28537
21	0.16325	0.42924	0.10257	0.08354	0.05089	0.06507	0.23522
22	0.42086	0.16413	-0.07625	0.17697	-0.06993	0.10208	0.25651
23	-0.14932	0.45183	0.21565	0.14776	0.03437	0.00581	0.29600
24	0.14249	0.00292	-0.06495	0.08091	-0.04354	0.35702	0.16043
25	0.10668	0.32222	-0.06955	0.12456	-0.01110	-0.00376	0.13570
26	0.02910	-0.06447	-0.11834	0.07510	0.23508	-0.04826	0.08120
27	-0.11302	-0.13072	0.48524	-0.18595	-0.23400	-0.10509	0.36570
28	0.15385	0.45803	0.09416	0.12085	-0.09847	0.04436	0.26860
29	0.42344	0.23654	0.03521	-0.02132	-0.10266	0.11808	0.26143
30	-0.18261	0.09961	0.11985	0.36702	-0.06300	-0.32461	0.30168
31	0.43075	0.29522	-0.00140	-0.18872	0.05587	0.00312	0.31146
32	0.02861	0.23764	0.53699	0.09202	-0.04587	-0.17825	0.38800
33	0.04481	0.53478	0.18361	0.12141	0.01345	0.01933	0.33700
34	0.43665	-0.08765	-0.00393	0.07774	0.26281	0.09831	0.28314
35	0.48509	-0.06217	-0.05060	0.05307	0.12717	0.17234	0.29043
36	-0.25008	0.10484	0.28804	0.27737	-0.14930	0.13344	0.27354
37	-0.01141	0.10151	0.64996	-0.02944	0.01150	0.04466	0.43588
38	0.15758	0.02611	0.04637	0.02466	-0.10464	0.27121	0.11278
39	-0.04178	0.15770	0.57986	0.14178	-0.03024	0.09863	0.39360
40	0.21459	-0.01546	-0.07541	0.13916	0.04099	0.40799	0.23948
41	0.36208	0.08812	-0.18132	-0.24918	0.29423	-0.09937	0.33029
42	-0.06669	0.11731	0.19495	0.32463	-0.22737	0.03662	0.21464
43	-0.05410	0.05752	0.21839	0.45683	0.00288	-0.19347	0.30006
44	0.01639	0.26534	0.71912	0.07897	-0.00585	-0.01956	0.59446
45	0.02207	0.03937	0.07939	-0.05641	-0.02674	0.40172	0.17362
46	-0.36227	0.04115	0.22006	0.37345	-0.11257	0.01704	0.33380
47	0.00047	0.05198	0.03238	0.57190	-0.00675	0.09646	0.34017
48	-0.14138	0.09787	0.53177	0.07733	-0.03634	-0.10803	0.33132
49	0.14397	0.11437	-0.07226	0.55835	0.11685	0.08888	0.37234
50	0.11919	0.16592	0.18316	0.38083	0.11451	0.03681	0.23478
51	0.52543	0.10887	-0.08986	-0.03654	0.07744	0.06723	0.30786
52	0.19091	0.17899	-0.08980	0.18557	0.22464	0.18146	0.19438
53	0.39800	-0.10537	0.02824	0.30140	0.17473	0.17393	0.32193
54	-0.00170	0.22293	0.37245	0.08538	0.05728	0.10653	0.21034
55	0.16171	0.05309	-0.01404	-0.18902	0.23692	0.34872	0.24263
56	0.31410	0.17265	-0.02221	0.10292	0.36276	0.08524	0.27842
57	-0.01470	0.16053	0.15678	-0.27521	0.23667	0.01786	0.18264
58	0.31301	0.00921	-0.14471	-0.24471	0.18324	-0.00039	0.21246
59	0.50007	0.01867	-0.07023	-0.00645	0.13666	0.02654	0.27477
60	0.02868	0.01019	-0.04348	0.16234	0.15353	0.40207	0.21441
61	0.15989	0.11584	0.06468	0.35132	0.15521	0.18179	0.22373
62	-0.00014	0.01118	-0.12786	0.30532	0.14752	0.02454	0.13206
63	0.04948	0.06282	0.15179	0.13975	-0.06268	-0.13032	0.06988
64	0.23702	0.03185	0.17658	0.06737	0.25413	0.10037	0.16757
65	0.30161	-0.00135	-0.06429	0.02795	0.38564	0.02612	0.24528

		原		著			
66	0.21729	0.03793	-0.00807	-0.03560	0.61692	-0.03843	0.43206
67	0.00847	0.04039	0.07893	-0.13247	0.54159	0.18828	0.35425
68	0.28182	-0.03309	0.01104	-0.13419	0.46772	-0.09530	0.32650
69	0.16051	0.00921	-0.00897	0.21945	0.36995	-0.21484	0.25711
70	0.05137	0.00670	0.00075	0.27030	0.25425	0.06129	0.14415
71	0.06175	0.71234	0.15234	-0.08380	-0.04167	-0.02574	0.54388
72	0.51559	0.00876	0.03257	0.09396	0.18214	0.26058	0.37687
73	0.11833	0.54570	0.08754	0.15761	-0.03391	0.09194	0.35390
74	0.27452	0.22412	-0.04630	-0.03939	0.11628	0.12587	0.15865
75	0.05991	0.29060	0.29665	0.19540	0.05380	-0.05087	0.21970
76	0.58611	-0.03190	0.00986	-0.00273	0.15527	0.07178	0.37391
77	-0.07883	0.56128	0.10855	-0.04430	0.04571	-0.06209	0.34094
78	0.22220	0.08446	0.05859	0.00373	0.08477	0.09727	0.07660
79	-0.06426	0.39310	0.04264	-0.08163	0.01103	-0.22894	0.21968
80	0.45485	0.00403	-0.10344	0.01041	0.18000	0.00666	0.25016
81	-0.04773	0.60795	0.12654	0.09238	0.05141	0.01783	0.39939
82	0.25120	-0.25640	-0.09475	0.04200	0.28183	-0.02786	0.21979
二乗和	6.68612	3.74859	3.21042	3.02750	2.95678	1.88063	21.51004
寄与率	8.15381	4.57145	3.91515	3.69207	3.60583	2.29345	26.23176
α 係数	0.8518	0.7633	0.7756	0.6211	0.6745	0.5162	

a) お金に対する態度に関する 6 つの尺度内容と測定項目

抽出された 6 つの因子を代表すると思われる項目を負荷量をもとに選び、それを尺度項目として得られたものをみると、第 I 因子の測定尺度は 19 項目からなり、「お金の社会的価値」と命名した。第 II 因子の尺度は 9 項目からなり、「社会における諸悪の根源」と命名し、第 III 因子の尺度は 7 項目からなり「社会や人生を狂わせるマ

ネーゲーム」と命名し、第 IV 因子の尺度も 7 項目からなり、「お金の使い方と人生の意義」と命名した。第 V 因子の尺度は 6 項目であり、「金儲けと使用の楽しみ」と命名し、第 VI 因子の尺度は 5 項目からなり、「お金の利用と処世術」と命名した。これら尺度の内容、信頼係数 (α 係数)、尺度平均値および標準偏差を挙げれば次の通りである。

1) 第 I 因子「お金の社会的価値」についての測定項目

(19 項目, $\alpha = 0.8518$, 5 段階評定, 尺度平均値 = 3.2523, SD = 0.5963)

- 8. 人間は何をするにも先立つものはお金である。
- 9. たいていのことはお金で解決できる。
- 13. お金は人間を評価するものさしである。
- 14. 現代社会では「金の切れ目が縁の切れ目」である。
- 16. お金があれば心にゆとりがもてる。
- 17. 現代社会ではお金が価値基準となっている。
- 18. お金は持つていればいるほど幸せである。
- 19. 社会的付き合いにはお金が必要である。
- 20. お金がなければ、人は一人前になれない。
- 22. お金が現代社会の仕組みを支えている。
- 29. お金を持ってば持つほど権力が増す。
- 31. お金さえあれば社会を思うように動かせる。
- 34. お金はたくさんあるにこしたことはない。
- 35. お金儲けは生きていく上で当たり前の活動である。
- 51. どれくらい財産をもっているかで社会的地位が決まる。

お金に対する態度と価値志向

- 59. どれくらいの収入があるかによって能力が評価される。
- 72. 現代社会が何事についてもうまく機能するには、絶対にお金が必要である。
- 76. お金のある人は、お金のない人より幸福になる可能性が高い。
- 80. 地位体系が必要な場合、お金はその適切な基礎となる。

2) 第Ⅱ因子「社会における諸悪の根源」についての測定項目

(9項目, $\alpha = 0.7633$, 5段階評定, 尺度平均値=3.3078, SD=0.5846)

- 21. 世の中に不公平があるのはお金があるためである。
- 23. 必要以上にお金を持つと人の心は醜くなる。
- 28. お金は犯罪のもとになる。
- 33. お金は人間を惑わす根源である。
- 71. お金は諸悪の根源である。
- 73. 社会病理的問題は、大部分、お金がもとで引き起こされたり悪化したりするものである。
- 77. 究極的には、お金は不潔なものか、不潔さを象徴化したものである。
- 79. 理想社会を確立するには、貨幣制度の廃止が前提条件である。
- 81. お金が関係してくると、何事も汚れたものになる。

3) 第Ⅲ因子「社会や人生を狂わせるマネーゲーム」についての測定項目

(7項目, $\alpha = 0.7756$, 5段階評定, 尺度平均値=3.4027, SD=0.5261)

- 27. 財テク・マネーゲームは経済の活性化に必要なことである。
- 32. マネーゲームは国や社会を崩壊させてしまうものである。
- 37. 財テク・マネーゲームは人々の勤労意欲を減退させるものである。
- 39. 財テク・マネーゲームをやっているとお金のありがたさがわからなくなる。
- 44. マネーゲームは人生の意義と経済感覚を狂わせる根源である。
- 48. マネーゲームのようにお金がお金を産むという機構は本来間違っている。
- 54. 財テク・マネーゲームなどをやるのは賭け事をやるのと同じである。

4) 第Ⅳ因子「お金の使い方と人生の意義」についての測定項目

(7項目, $\alpha = 0.6211$, 5段階評定, 尺度平均値=4.0687, SD=0.5233)

- 30. 目先のためだけにお金を使うのはよくない。
- 43. 無駄金はなるべく使わず、意義のある使い方をすべきである。
- 46. お金で人間は評価できない。
- 47. お金の使い道を考え予算をたてることは、自己管理の意味で必要なことである。
- 49. お金の使い道や予算を考えることは、自分の人生設計を考えることにつながる。
- 50. お金の使い方でその人の価値観がわかる。
- 61. お金に対する態度はその人の人間性を反映するものである。

5) 第Ⅴ因子「金儲けと使用的楽しみ」についての測定項目

(6項目, $\alpha = 0.6745$, 5段階評定, 尺度平均値=3.2323, SD=0.7432)

- 56. 人は誰しも限られた財産をどうしたら増やせるか考えている。
- 65. お金儲けはそれだけで楽しみである。
- 66. お金をもらうのはどんな場合でもうれしいことである。
- 67. どんな場合でも、お金を使うのは楽しいことである。
- 68. 贈り物は品物よりお金もらう方がうれしい。
- 69. お金を貯めることそのものが楽しみである。

6) 第VI因子「お金の利用と処世術」についての測定項目

(5項目, $\alpha = 0.5162$, 5段階評定, 尺度平均値=3.7143, SD=0.6362)

- 24. 商売や事業をするには、借金は必要な行為である。
- 40. 上手な借金は処世術のひとつである。
- 45. お金を貯めるのは使うためであり、貯めるだけでは意味がない。
- 55. お金の使い道や予算を考えずに思い切り使うのは楽しいことである。
- 60. 借金ができるのは、その人に信用があるからである。

b) 総得点と各項目得点との相関および項目間相関

次に、各尺度において、測定しようとする因子とそれとの項目はどのように関連するか、すなわち、内的妥当性はどうであるかを検討するために、各尺度の総得点と各項目の相関を検討することにする。Table 3 は、各尺度毎に総得点と各項目得点との相関を示しているが、相関させる項目の得点はここでの総得点から除かれている。つまり、その尺度の他のすべての項目の総得点とそれぞれの項目得点との相関である。

総得点と各項目得点の相関はある程度高い方が望ましいが、あまり高過ぎても意味がない。つまり、幾つかの項目が集ってある因子を測定していると考えるので、相関が低すぎる項目は、その因子を測定しているかどうか疑わしくなる。また、高すぎるのは、どの項目も同じものを測定している可能性があり、重なった意味の項目がそれだけ必要かどうか疑問になってくる。従って、適度に高い相関が望ましい。

Table 3 からわかるように、第 I 因子では、.5以上の相関値を示すものが 3 個、.4以上のものが 12 個、.3 以上が 4 個である。第 II 因子では、.5 以上の相関値が 2 個、.4 以上が 5 個、.3 以上が 2 個である。第 III 因子では、.6 以上の相関値が 1 個、.5 以上が 4 個、.4 以上がなく、.3 以上が 2 個となっている。これら 3 つの因子については

適切な範囲の相関値を示していると考えてよかろう。第 IV 因子では、.4 以上が 2 個、.3 以上が 3 個、.2 以上が 1 個、.15 以上が 1 個となり、やや低い範囲の値を示している。第 V 因子では、.5 以上が 1 個、.4 以上が 2 個、.3 以上が 3 個と、これは適切な範囲の値を示している。第 VI 因子では、.3 以上が 3 個、.2 以上が 3 個、.2 以上が 1 個、.15 以上が 1 個となりやや低い範囲の値を示している。これらの相関値の範囲は信頼係数の指標としての α の値に対応している。

しかし、全体として、各因子の意味の明確さと各尺度の総得点と構成項目との相関値の高さから、これらの尺度はかなり妥当なものと考えてよかろう。

次に、測定尺度の内的妥当性を検討するために各尺度における項目間の相関を検討してみることにする。前述したように、同じ尺度を構成する項目間の相関は高過ぎないことが望ましい。それは、各項目がそれぞれ尺度の違った側面を測定していて、全体として全領域をカバーしている方が望ましいからである。項目間の相関が高すぎるのはそれらの項目が同じ内容の質問である可能性があり、同じ内容を幾つもの重なった項目で測定する必要はないからである。そこで、Table 4 から Table 9 までにそれぞれの因子毎に項目間相関の範囲を挙げることにする。

Table 3 各因子毎の総得点と各項目の相関

項目	因子 I	項目	因子 II	項目	因子 III	項目	因子 IV	項目	因子 V	項目	因子 VI
Q 8	0.4770	Q21	0.3606	Q27	0.3391	Q30	0.3122	Q56	0.3497	Q24	0.3310
Q 9	0.4998	Q23	0.4050	Q32	0.5398	Q43	0.4368	Q65	0.4086	Q40	0.3744
Q13	0.3511	Q28	0.4484	Q37	0.5474	Q46	0.1872	Q66	0.5282	Q45	0.2329
Q14	0.3835	Q33	0.5131	Q39	0.5557	Q47	0.4622	Q67	0.3732	Q55	0.1917
Q16	0.3899	Q71	0.5951	Q44	0.6668	Q49	0.3892	Q68	0.4029	Q60	0.3195
Q17	0.4023	Q73	0.4363	Q48	0.5190	Q50	0.3510	Q69	0.3645		
Q18	0.4873	Q77	0.4466	Q54	0.3502	Q61	0.2731				
Q19	0.4173	Q79	0.3189								
Q20	0.4652	Q81	0.4842								
Q22	0.3730										
Q29	0.4347										
Q31	0.4243										
Q34	0.4499										
Q35	0.4349										
Q51	0.5019										
Q59	0.4647										
Q72	0.5032										
Q76	0.5332										
Q80	0.4477										

お金に対する態度と価値志向

Table 4 第I因子「お金の社会的価値」についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.40 - .49	4
.30 - .39	23
.20 - .29	96
.10 - .19	44
.00 - .09	4
計	171

Table 5 第II因子「社会における諸悪の根源」についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.40 - .49	2
.30 - .39	12
.20 - .29	13
.10 - .19	9
計	36

Table 6 第III因子「社会や人生を狂わせるマネーゲーム」についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.50 - .59	3
.40 - .49	2
.30 - .39	7
.20 - .29	8
.10 - .19	1
計	21

Table 7 第IV因子「お金の使い方と人生の意義」についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.40 - .49	1
.30 - .39	3
.20 - .29	7
.10 - .19	6
.00 - .09	4
計	21

Table 8 第V因子「お金儲けと使用の楽しみ」についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.40 - .49	2
.30 - .39	1
.20 - .29	7
.10 - .19	5
計	15

Table 9 第VI因子「お金利用と処世術」についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.40 - .49	1
.30 - .39	0
.20 - .29	2
.10 - .19	4
.00 - .09	3
計	10

Table 10 6つの尺度間の相互相関

	第I因子	第II因子	第III因子	第IV因子	第V因子	第VI因子
第I因子	1.0000					
第II因子	0.1014	1.0000				
第III因子	0.0199	0.4393	1.0000			
第IV因子	-0.0384	0.2712	0.3986	1.0000		
第V因子	0.4595	-0.0230	0.0401	0.0190	1.0000	
第VI因子	0.3574	0.0179	-0.0869	-0.1155	0.1618	1.0000

Table 4 から Table 9 までの結果から、第I因子、第II因子、第III因子、第IV因子については適度な高さの相関値だと思えるが、第V因子と第VI因子の中に低い相関値の数が多くなっている。これらの因子については、内的妥当性がやや低い可能性があるといえよう。

b) 各因子尺度間の相互相関

お金に対する態度に関する6つの因子が抽出されたが、それらの因子間でどのような関係にあるかを確かめるため相互相関を算出した。その結果は Table 10 に示す通りである。

Table 10 の結果、6つの尺度はかなり明確に分かれだが、それらの間にはある程度の相関がみられるものもある。第Ⅰ尺度である「お金の社会的価値」は、第Ⅴ尺度である「お金儲けと使用の楽しみ」および第Ⅳ尺度である「お金の利用と処世術」とにそれぞれ、 $r=0.4595$, $r=0.3574$ とかなりの相関があり、第Ⅱ尺度の「社会における諸悪の根源」は第Ⅲ尺度の「社会や人生を狂わせるマネーゲーム」と $r=0.4393$ とかなりの相関を示し、第Ⅳ尺度の「お金の使い方と人生の意義」は第Ⅲ尺度の「社会や人生を狂わせるマネーゲーム」と $r=0.3986$ という値の相関を示している。その他の因子間にはほとんど有意な相関がみられない。このことは、それぞれ理解できる関連であり、それぞれの尺度が独自の意味をもっているものと解釈できる。

(4) 外的妥当性としての自由に使用できる金額

お金に対する態度は自由に使用できるお金の額と何らかの関係があるのではないかと考えられる。自由に使用できる金額として、a) 現実の金額、b) 希望の金額の2種を考えてみる。この2種の金額と各尺度とに関連が

見出されれば、ある意味での外的妥当性を確かめることができる。

そこで現実の金額として、「1か月にお金をどれくらい自由に使うことができますか」と尋ね、希望の金額として、「1か月にどれくらいあれば十分ですか」を万円単位で尋ねた。その結果、1) 1万円台以下、2) 2~3万円台、3) 4万円台以上、の3グループに分け、各尺度の値を分散分析し比較してみた。その結果は以下の通りである。

a) 現実に自由になる金額

現実に自由になる金額を、上、中、下の3グループに分けて、各項目反応の違いの有意性を検討した結果、6項目について危険率5%以下の水準で有意差を見出した。それらはTable 11に示すように、項目2, 11, 19, 30, 62, 82、であり、その傾向はかなり一貫したものであった。すなわち、4万円以上の上位群は他の群に比べて、お金が使われれば使われるほど社会は活発化し、労働がお金で評価されるのは当然であり、社会的お付き合いにはお金が必要であり、お祝い金やお見舞い金は社会生活上潤滑油的働きをし、お金のおかげで世の中は良くなる

Table 11 自由になる金額とお金に対する態度

	項目 2		項目 11		項目 19		項目 30*		項目 62		項目 82	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1万円以下	3.25	0.97	3.18	1.06	4.03	0.81	3.51	1.19	2.99	1.09	2.90	0.86
2・3万円	3.30	0.98	3.10	1.08	4.13	0.66	3.56	1.06	3.27	1.09	2.58	0.87
4万円以上	3.64	1.01	3.49	1.11	4.34	0.74	3.04	1.26	3.40	1.24	2.82	0.94

*: 逆得点項目

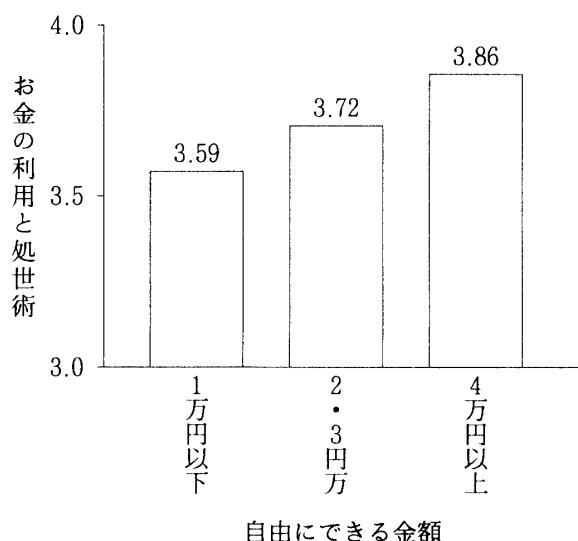


Fig. 1 自由にできる金額と「お金の利用と処世術」

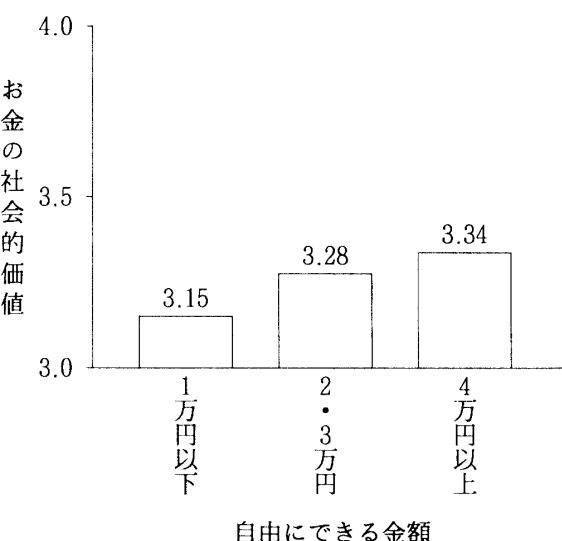


Fig. 2 自由にできる金額と「お金の社会的価値」

お金に対する態度と価値志向

と思っていた。また、目の楽しみのためだけにお金を使うのは良くないという考えに反対する者が多かった。

このことは、お金を自由に使える額が高ければ高いほどお金に好意的であり、お金によって左右される傾向が強いように思われた。

したがって、6つの因子についても3グループ間に有意差がみられるのではないかと思われた。分散分析の結果、因子VI「お金の利用と処世術」について5%水準で有意差を示し、因子I「お金の社会的価値」については10%水準でその傾向を示した。それらの結果は、Fig. 1とFig. 2に示されている。

Fig. 1から、自由にできる金額が多ければ多いほど「お金の利用は処世術だ」と考える者が多く、Fig. 2から、自由にできるお金の額が高い者は、「お金の社会的価値」を高く評価している傾向がみられる。この傾向は、原岡(1989, 1990)の結果と同じであった。

b) 希望の使用金額

「1か月にどれくらいあれば十分ですか」という質問

に対する回答を先に上げた3つのグループに分けた場合、現実に自由になるお金の額の基準よりもずっと多くの態度項目に有意差を示した。すなわち、5%以下の水準で有意であった項目は22個あり、項目7, 11, 12, 13, 20, 24, 26, 34, 35, 41, 50, 55, 58, 59, 63, 65, 67, 76, 77, 78, 80, 81がそれであった。これらの反応はTable12に示されている。

「どれくらいあれば十分ですか」という希望の金額を基準に3つのグループに分けて比較すれば、Table12からわかるように、お金に対する態度についての質問項目のうちかなりの部分に有意差がみられ、しかも、その傾向が一定していることがわかる。すなわち、中間グループの者と他の2つのグループの者との間に有意な違いがある場合がほとんどである。たとえば、中位グループの者は金額の高い者や低い者より、普通の生活をしていくだけのお金があれば十分であり、人間にとって大切なものはお金では買えないと思い、人間を評価するものとしてお金を考えず、お金がなければ一人前になれない

Table 12 自由になる理想金額とお金に対する態度

項目 7*		項目 11		項目 12		項目 13		項目 20		項目 24		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1万円以下	3.05	1.45	3.23	1.15	4.44	0.91	1.67	1.09	2.95	1.36	3.81	0.93
2・3万円	3.18	1.27	2.98	1.13	4.66	0.71	1.48	0.78	2.71	1.14	3.62	1.00
4万円以上	2.73	1.35	3.43	1.00	4.35	0.92	1.86	0.94	3.25	1.11	3.99	0.90
項目 26		項目 34		項目 35		項目 41		項目 50		項目 55		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1万円以下	2.37	1.00	4.05	1.07	3.79	1.23	2.05	1.29	3.33	1.36	3.37	1.33
2・3万円	2.64	0.81	3.77	1.07	3.37	1.19	1.71	0.94	3.76	1.00	3.10	1.28
4万円以上	2.77	0.93	4.24	0.93	3.88	0.93	2.10	1.18	3.79	0.97	3.67	1.14
項目 58		項目 59		項目 63*		項目 65		項目 67		項目 76		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1万円以下	1.98	1.20	2.51	1.24	3.28	1.24	3.35	1.23	2.98	1.26	3.58	1.24
2・3万円	1.94	0.98	2.56	1.14	3.21	1.03	2.87	1.14	2.86	1.03	3.07	1.15
4万円以上	2.28	1.11	2.92	1.26	2.89	1.07	3.23	1.20	3.34	1.11	3.54	1.17
項目 77*		項目 78		項目 80		項目 81*						
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1万円以下	2.51	0.94	3.51	0.94	3.35	1.21	2.74	1.07				
2・3万円	2.96	0.84	3.07	0.75	2.94	0.96	3.06	0.92				
4万円以上	2.69	0.91	3.18	0.77	3.33	0.95	2.74	0.93				

*: 逆得点項目

とは考えず、お金儲けは生きていく上で当たり前の活動とは思っていないし、人間の最終目的をお金儲けだとも思っていないことである。これらのことから、中位グループの者は、生きていく上でお金をどのように統制し利用するかに価値をおいているものと思われる。これに対し、高い金額の者と低い金額の者はお金の多少によって生き方が左右され、お金のために生きているようにさえ思われる。

したがって、6つの因子尺度においても3つのグループ間に違いがあると思える。分散分析の結果、6つの因子のうち5つが5%以下の水準で有意差を示した。これらの結果はFig. 3からFig. 7までに示されている。

Fig. 3は第I因子「お金の社会的価値」についてであるが、1%以下の水準で有意差を示したもので、中位

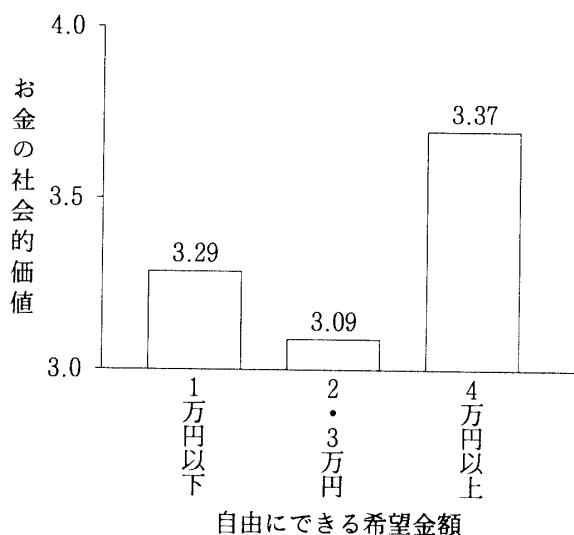


Fig. 3 自由にできる希望金額と「お金の社会的価値」

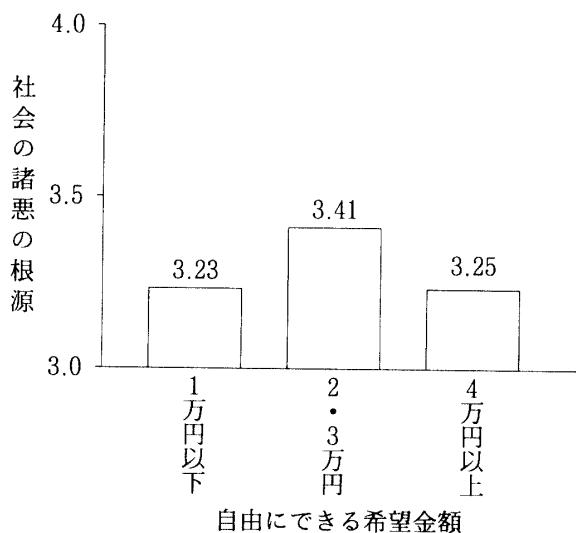


Fig. 4 自由にできる希望金額と「社会における諸悪の根源」

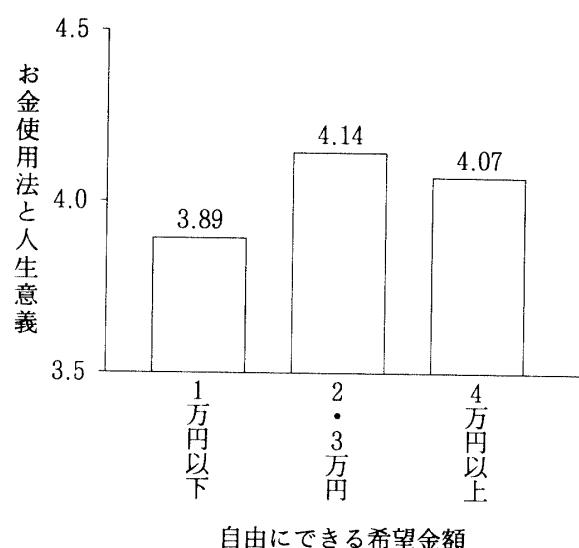


Fig. 5 自由にできる希望金額と「お金の使い方と人生の意義」

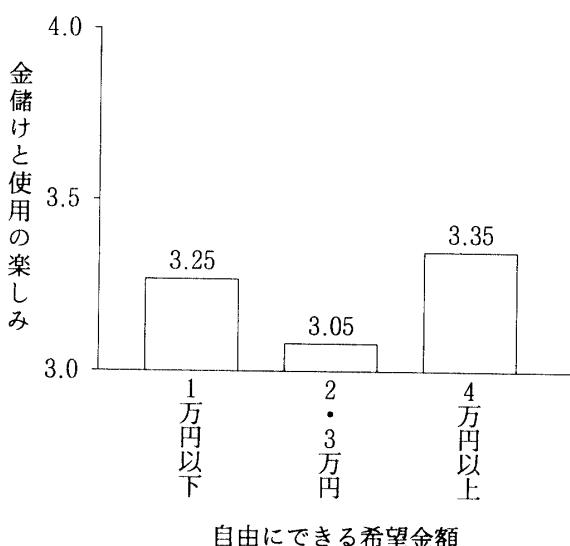


Fig. 6 自由にできる希望金額と「お金儲けと使用的楽しみ」

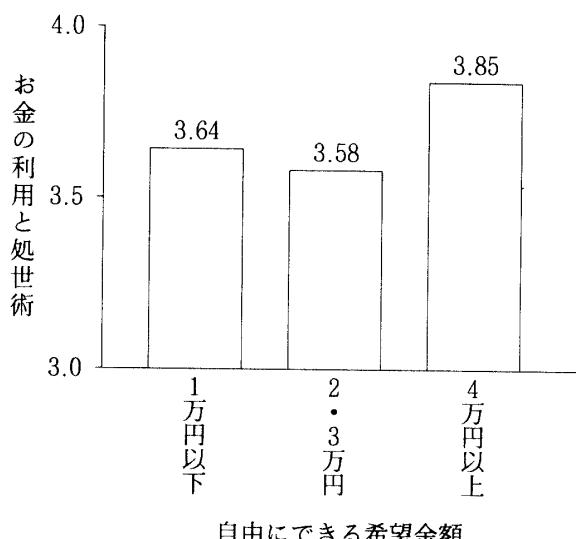


Fig. 7 自由にできる希望金額と「お金の利用と処世術」

グループの者は上位および下位グループの者よりお金の社会的価値を低く評価していることがわかる。Fig. 4は第II因子「社会における諸悪の根源」であり、やはり中位グループは、この考えを受け入れる態度が有意に高い。

Fig. 5は第IV因子「お金の使い方と人生の意義」であるが、予想どおり中位グループが有意に高い値を示している。また、第V因子「お金儲けと使用の楽しみ」はFig. 6に示されていて、やはり中位グループはこの考えを最も低く受け入れている。さらに、第VI因子の「お金の利用と処世術」についてはFig. 7に示しているが、やはり中位グループがこの考えを最も低く受け入れている。

これらの結果から、現実に自由になるお金の額よりも希望するお金の額の方がお金に対する態度をよりうまく反映するものであるとも考えられことから、ここで示した6つの尺度は、かなりの高さで外的妥当性を示したものと解釈できよう。

今後は、これらお金に対する6つの尺度を基にしながら、個人的価値観との関係について検討してみることが必要だと思われる。

要 約

本研究は、お金に対する態度の構造を明らかにしようとするものであり、第1研究では、お金に対する態度を表す内容を幅広く集め、それを構造化することを目的とし、第2研究では、その結果を基に質問項目を作成して調査を行い、因子分析によってその構造を明らかにし、主要な次元を抽出してお金に対する態度測定の尺度を構成し、その結果の信頼性と妥当性を吟味したものである。

第1研究では、お金に対する態度を測定するための意見を幅広く収集するために、年齢、性別、職業などを考慮して、40名の被調査者に「お金と人間の関係」について思いつくことをできるだけ多く自由記述させた。

得られた意見内容を検討し、その内容をもとに単位毎に区切り、それぞれが何を意味するかを簡潔に表現したステートメントに変換し、カードに記録した。その数は617個に達した。これらをK J法を用いて構造化した。

得られた結果は、(1)お金は人々や社会を豊かにし幸せにするものであり、お金を得たり、使ったりすることは楽しいことである。(2)お金で人を評価することはできな

いが、その使い方によってその人の生き方がわかるものである。(3)お金のやりとりやお金儲けなどが、人々を狂わせ、人間関係を悪くし、ついには社会や国家を崩壊させることになる、の3つの領域に分けられた。

第2研究では、第1研究において得られた結果を参考に、内容に重なり合いのないよう配慮して、お金に対する態度測定のための質問項目を作り変え、これに原岡(1988)の中のお金に対する態度質問12項目を加えた計82項目を作成し、これらをランダムな順序に並べて5段階による選択法で回答を求めた。被験者は大学生525名で、男性374名、女性151名であった。

これらの回答は、(1)お金に対する態度項目への反応の実態、(2)お金に対する態度の因子分析、(3)各因子の測定尺度の信頼性と妥当性、の観点から検討された。

主な結果は次のとおりであった。

- ① お金に対する態度の実態として、現在の大学生たちは、社会におけるお金の必要性を認めながら、お金万能でなく、人間の価値をお金で評価するのではなく、お金を十分に管理し統制することが大切であると考えているものと解釈された。
- ② 因子分析の結果6つの因子が抽出された。第I因子の測定尺度は19項目からなり、「お金の社会的価値」と命名した。第II因子の尺度は9項目からなり、「社会における諸悪の根源」と命名し、第III因子の尺度は7項目からなり「社会や人生を狂わせるマネーゲーム」と命名し、第IV因子の尺度も7項目からなり、「お金の使い方と人生の意義」と命名した。第V因子の尺度は6項目であり、「金儲けと使用の楽しみ」と命名し、第VII因子の尺度は5項目からなり、「お金の利用と処世術」と命名した。
- ③ 各尺度の信頼性は α 係数で示され、第VI因子は必ずしも高いとはいえないが、他の因子は満足いく程度に高く、また、尺度総得点と各項目得点との相関値から、全体として安定性があるものと解釈された。
- ④ 内的妥当性として、項目間相互相關、尺度間の相関が検討され、外的妥当性としては「自由に使用できる金額」を用いて検討され、これらが6つの尺度とかなりの程度関連をもつことがわかり、一応の妥当性があるものと解釈された。
- ⑤ 今後は、これらお金に対する6つの尺度と個人的価値観との関係の検討が示唆された。

原 著

参考文献

原岡一馬 1989 お金に対する態度の構造 日本社会心理学会第33回公開シンポジウム発表
原岡一馬 1990 お金に対する態度と価値志向 I 日本

社会心理学会第31回大会発表論文集 134-135.
リンドグレン H. C. 原岡一馬 訳 1988 お金の心理学 有斐閣 (Lindgren, H. C. 1980, *Great Expectations : The Psychology of Money* : William Kaufman, Inc.)
(1990年8月31日 受稿)

ABSTRACT

Attitude and Value-Orientation toward Money
Attitude Structure and Composition of an Attitude Scale
Kazuma HARAOKA

A two part study was conducted in order to investigate the structure of people's attitude toward money. In the first part, a wide collection of opinions about mony was gathered through a free-response questionnaire. The second part utilized this information for the purpose of devising items with which factor analysis was done. The structure of the attitude toward mony, thus, was determined, revealing its main dimensions and yielding scales upon which this attitude can be measured.

The first part of the study involved asking some 40 subjects from varied age and occupational backgrounds, for their opinions about the relationship between people and mony. Subjects were asked to list as many ideas as possible in a free-response format. Each response was content analyzed to produce single units of ideas, which were converted to simple statements written down on individual cards numbering 617 in all. These units were then structured using the KJ method. As a result, the following three major areas were attained: 1. Money makes people and society affluent and happy; gaining mony and spending it is enjoyable; 2. The amount of money a person has cannot be used to evaluate him/her, but how he/she spends it can tell us about his/her lifestyle; and 3. Money making schemes and monetary transactions make people lose their sense of morals, destroy their important relationships, and even lead to the demise of a whole society or nation.

The second part of the study was concerned with the composition of items for the attitudescale. The statements obtained in the first part became the basis for this, plus 12 items used in a previous study (Haraoka, 1988). A total of 82 items were devised and ordered randomly, each with five-point Likert type scales. The questionnare was administered to 525 university students, 374 of them male and 151 female. The responses were implemented in three ways: 1. to determine the response patterns toward each item; 2. to conduct a factor analysis of the attitude toward mony; and 3. to determine the reliability and validity of the resulting scales of the factor analysis. The response behavior of the subjects revealed that present day university students recognize the necessity of money in society, yet they deny the almightyess of mony. They also do not feel it proper to evaluate a person on the basis of mony, and perceive the importance of managing and controlling money. The factor analysis yielded six factors: 1. "the social value of money" (19 items); 2. "money as the root of all evil within society" (9 items); 3. "life ruining investment schemes and mony games" (7 items); 4. "use of mony and the meaning of life" (7 items); 5. "mony making and the enjoyment of spending" (6 items); and 6. "money use and successful life management" (5 items). The internal reliablility coefficients for all but the sixth factor were satisfactory, and the correlations between sigle items and their respective scales showed a reasonable degree of overall stability. The internal validity as evident from between item and between scale correlations, and the external validity as considered through the correlation of the six scales with the amount of mony available to use freely per month, showed that the validity of the scales was satisfactory.

As a future directive, these six scales could be used to relate individual values with people's attitude towerd mony.